

PP317091 大網原発脂肪肉腫の一例

中川基人, 金井歳雄, 高林 司, 才川義朗, 川野幸夫, 坂田道生, 関みな子, 杉浦功一, 清水雄介
(平塚市民病院外科)

【症例】58歳, 男性。主訴は下腹部痛。理学的, 血液学的には異常無し。画像検査で右下腹部に9cmの充実性腫瘍を認めたが内部に脂肪成分は描出されなかった。血管造影で右胃大網動脈の大網枝末梢に腫瘍濃染像を認めた。大網原発悪性腫瘍の診断で開腹すると, 超手拳大の腫瘍を大網末梢に認めた。腹水や臓器転移はなく, 腫瘍は大網の一部と共に切除した。組織では充実性に増殖する類円形細胞の像を認め, 辺縁で一部脂肪織に移行しており, 免疫染色で円形細胞型脂肪肉腫と診断された。術後7ヶ月の現在無再発である。【考察】脂肪肉腫の好発部位は四肢, 体幹であり大網原発例の論文報告は10例に過ぎない。組織学的には高分化型, 粘液型, 円形細胞型, 多形型, 脱分化型に分類され, 組織型で悪性度が異なる。近年, 粘液型と円形細胞型でのTLS/FUS-CHOP 遺伝子の高率な発現が報告され, 悪性度の差異に関わると推察されている。大網原発脂肪肉腫に遺伝子解析を行い得たので報告する。

PP317092 大腸癌の腹膜播種を疑った魚骨による大網腫瘍の1例

笹原孝太郎¹⁾, 安本和生²⁾, 塚田一博²⁾
(富山通信病院外科¹⁾, 富山医科薬科大学第2外科²⁾)

大腸癌手術時に腹膜播種を疑った魚骨による大網腫瘍の1例を経験したので報告する。【症例】患者は83歳男性。主訴は腹痛。当院内科受診し上行結腸癌と診断され当科紹介, 右半結腸切除術を施行した。大網腫瘍が存在し腹膜播種と判断し小腸部分切除, 大網切除を併施した。結腸癌は tub2, ss, ly0, v0, n0 であり大網腫瘍は魚骨による肉芽腫と診断した。【考察】魚骨穿孔は緊急手術症例が多く, 慢性型では原因不明の腫瘍と診断されることが多い。本例では術前には腹腔内腫瘍とは診断できなかったが, CTを再検討した結果, 線状石灰化像が確認可能であった。【まとめ】腹腔内腫瘍では鑑別疾患を考慮し画像検査の詳細な再検討が必要であり, 過剰な治療を避けるべきである。

PP317093 FDG-PET が腹膜播種の局在診断・術後化学療法の効果判定に有用であった大網原発SSPCの1例

藤井孝明, 齋藤加奈, 深澤孝晴, 大野哲郎, 井出宗則, 諸岡勝美, 平山功, 森永暢浩, 中村純一, 藤田欣一, 浅尾高行, 桑野博行
(群馬大学第1外科)

【目的】SSPCの大腸癌合併症例において, FDG-PET が腹膜播種の局在・術後治療判定に有用だったので報告する。【症例】72歳, 女性。主訴は左腹部不快感。合併症は子宮筋腫。エコーで径11cmの腹部腫瘍と腹水・胆石を認め, 血管造影上, 腫瘍は大網原発であった。血液検査ではCA125が高値。大腸内視鏡でS状結腸に2型の腺癌を認めた。術前のFDG-PETでは, 主病変・Douglas窩・右横隔膜下に集積を認めた。開腹で, 大網腫瘍摘出・S状結腸部分切除・胆摘・子宮全摘・両側付属器摘除術を施行し, FDG-PETで高集積の部位に腹膜播種がみられた。病理組織学的に腫瘍はSSPCで, S状結腸癌の深達度はmpであった。現在術後化学療法中である。6ヶ月後のFDG-PETで, 右横隔膜下の集積が低下している。【結論】FDG-PETは, 腹膜播種の術前診断・術後化学療法の効果判定に有用である。

PP317094 横隔膜合切, 再建を施行した巨大大網腫瘍の一例

金子朋代¹⁾, 大山繁和¹⁾, 高山祐一¹⁾, 太田恵一朗¹⁾, 山口俊晴¹⁾, 高橋孝¹⁾, 中島聰徳¹⁾, 武藤徹一郎²⁾, 澤泉雅之²⁾, 柳澤昭夫³⁾, 加藤 洋³⁾
(癌研究会附属病院消化器外科¹⁾, 癌研究会附属病院形成外科²⁾, 癌研究会附属病理解剖部³⁾)

【はじめに】横隔膜, 脾, 脾, 左腎への浸潤を伴った巨大平滑筋肉腫に対し, 形成外科医と共に治癒切除し得た一例を経験した。【症例】55歳女性。2000年6月腹部腫瘍にて当科入院。画像にて, 腫瘍は第9,10肋間筋, 横隔膜, 胸壁, 脾, 脾, 左腎へ浸潤。8月, 腫瘍, 脾, 脾, 左腎, 横隔膜合切切除術を施行。筋皮弁による肋間再建予定であったが, 胸壁浸潤はなかったため, 横隔膜再建を筋皮弁にて形成した。再建は, 上腹壁動脈を温存し, 腹直筋の有茎筋弁を形成。現在再発はない。【まとめ】他臓器浸潤を伴った巨大腫瘍の手術には, 消化器外科医のみの手技では限界があるが, 他科と共に施行する事により従来切除不能と判断された症例でも根治切除が可能となる。他臓器浸潤を伴った巨大腫瘍に対する手術について, 文献的考察を加えて報告する。

PP317095 消化器癌手術における自己血貯血の意義と普及への対策

浅野 博, 篠塚 望, 阿達竜介, 鈴木智晴, 俵 英之, 上笹 直, 小沢修太郎, 渡辺拓自, 松本 隆, 安西春幸, 小山 勇
(埼玉医科大学第一外科学教室)

【目的】消化器癌手術における自己血輸血の状況を分析しその意義と問題点を検討した。【対象と方法】5年間に施行された計477例を対象とし貯血群は169例, 非貯血群は308例となった。【結果】貯血群における平均術前期間は年々短縮し非貯血群と差を認めなかった。貯血群における年度別平均貯血量はやや減少する傾向を示したが術中同種血輸血回避率は逆に上昇した。術後合併症は貯血群が少ない傾向を示した。貯血群のうち受診時Hb濃度が13.0g/dl未満の29例に対し皮下注用rh-EPOを貯血前から投与したが貯血に伴うHbの低下は僅かであった。【結語】消化器癌における自己血貯血は症例に応じた綿密な貯血スケジュールの確立が今後さらなる普及に必要と考える。

PP317096 消化器外科手術における自己血輸血システムの確立と同種血輸血回避への有用性

浜田弘巳, 長谷川公治, 高田譲二, 佐藤 篤, 工藤岳秋, 岡田昌生, 勝木良雄, 辻 寧重
(日鋼記念病院外科)

【目的】当科において作成した自己血輸血システムの同種血輸血回避への有用性について検討する。【対象と方法】1998年1月全病院的自己血輸血の推進とともに作成した自己血システムに従い自己血を確保した消化器癌待機手術症例は193例(貯血75, 希釈36, 貯血+希釈82)の術中出血量, Hb値, 同種血輸血回避率について検討した。【結果】同一期間中の自己血非準備例は21例のみであった。自己血例の同種血輸血回避率は85.0%であった。出血量1000g以上(n=48)で54.2%, Hb11g/dl以下(n=29)で65.5%で同種血輸血を回避しえた。【まとめ】同種血輸血回避における自己血輸血の有用性が確認されるとともに, 院内システムの確立により自己血の確保が円滑におこなえた。

PP317097 生体肝移植ドナーにおける術前自己血貯血の意義

千須和寿直, 池上俊彦, 橋倉泰彦, 中澤勇一, 浦田浩一, 和田義人, 小川真一郎, 荻野史朗, 北原弘恵, 寺田 克, 宮川真一, 川崎誠治
(信州大学第1外科)

【目的】生体肝移植ドナーの自己血貯血の意義について検討した。【方法】2001年2月までの140例の生体肝移植ドナーを対象とし, その術中出血量, 術中輸血量, 合併症を検討した。【結果】外側区域切除, 拡大外側区域切除, 左葉切除, 拡大左葉切除で, 出血量は467±264.485±161.779±409.882±460ml, 全血輸血量は86±190.0±0.137±216.240±358ml, FFP輸血量は676±460.573±250.864±568.844±414mlであった。全例で自己血以外の輸血を施行せず, また自己血輸血に伴う大きな合併症を認めなかった。【まとめ】生体肝移植ドナーで術前に自己血貯血を行うことにより安全にドナー肝切除, 輸血療法が可能であった。

PP317098 消化器癌手術時の希釈式自己血輸血導入について一特に出血量および生体への影響について一

下山 修, 加瀬 肇, 鷺澤尚宏, 戸倉夏木, 本田亮一, 小林一雄, 寺本龍生, 平野敬八郎
(東邦大学第一外科学教室)

目的と方法: 75歳以下の消化器癌手術患者24人を対象としてHATを導入し, 出血量および実際の出血量を算定し, 脱血・希釈時の血液データ, および免疫学的パラメーター循環動態を観察した。結果: 出血により他家輸血を余儀なくされたのは4例であった。平均の出血量は655mlで, 算出した実際の出血量の平均は379mlであり, もしHATを導入しなければ33%の症例に他家血輸血を行う必要があった。CO, CIは脱血・希釈により上昇を認め, Hb, HCT, PLT, 凝固系は希釈時に低下を認めたが, 返血により回復した。周術期において出血傾向は見られなかった。また, 免疫学的パラメーターから, HATにより術後の免疫能低下が軽減されたと思われた。まとめ: HATは出血量を削減し, 循環・止血機能, 免疫学的にも悪影響が少ないため, より積極的に導入されるべきと考えられる。